土浦幼稚園の掛図に関する研究

牧　野　由　理

A Study on Wall charts in Tsuchiura Kindergarten

Yuri Makino

1. はじめに

本研究の目的は、明治期の幼稚園の図画教育で使用されたと推測される掛図の分析を行い明治期の図画教育の特質を明らかにすることである。

筆者は拙稿[1,2]において、明治期に出版され当時の幼児教育に影響を与えた代表的文献の記述や図版を対象とした研究を行い明治期の図画教育観について調査してきた。また明治13（1880）年に開設された愛珠幼稚園（現・大阪市立愛珠幼稚園）の保育記録および図画作品を分析し、当時の幼稚園で実際に行われた図画表現を明らかにした[3]。愛珠幼稚園の明治37（1904）年4月4日～明治38（1905）年3月25日までの保育記録である「保育日記・第壹の部」によれば「談話ノ参考書絵画ヲ見セテ我好ム所ヲ画カシム」[4]という記録がある。保育項目の一つである談話と図画を関連させ談話で使用される「参考書絵画」を見せて描かせていたことがわかる。しかしながら「参考書絵画」が談話の掛図をさすのか談話の本の挿絵をさすのか詳述されていないため不明である。そこで現存する明治期の掛図を分析し、図画にどのように利用されていたのか調査することとした。

本稿では、明治18（1885）年に土浦西小学校（現・土浦小学校）附属幼稚園として開園した土浦市立幼稚園（以下「土浦幼稚園」とする）の掛図を対象とする。土浦幼稚園にはフレーベルの恩物をはじめ教具、玩具、掛図、記録類など貴重な資料が残されており、現在は土浦市立博物館に寄託されている。また土浦幼稚園には貴重な掛図があり、図画に使用されたと推測される掛図も現存するため調査対象としたい。

2. 掛図とは

掛図とは、学校の教室において黒板や壁面に掲げて教授の際に用いた大判の絵図や表などを指す。掛図は使用するたびに損傷がすすみ、たいていのものは大型であるため、保管が難しく破棄されてしまったものが多い。現存する掛図はそれほど多くはない。「元来は厚手和紙の一枚物であったが、授業での掲示を考えてか、関連ある内容のものを二枚ずつ背中合わせに貼り合わせて全体として厚くし、かつ上部に竹または細板各二枚をもって補強するとともにそれに吊り紐を結ぶ」という方法や「一枚ずつ掛け軸風のりっぱな装幀をほどこし、掲示と収蔵との便を図る」といった方法をとり各学校で加工していたという[5]。

佐藤秀夫による「掛図の研究・序説」によれば、日本で掛図がつくられたのは明治6（1873）年のことである。米国で初等教育用に観光されていた各種のchartを模して、東京師範学校が28枚の掛図を作成した。明治7（1874）年に児童用教科書および掛図の多くが改版され、それを機に編集・刊行者名が「東京師範学校」から「文部省」に

改められた。

文部省は明治6（1873）年10月7日に次のように布達した。

幼童家庭ノ教育ヲ助ル為メニ、今般当省ニ於テ各種ノ絵画玩具ヲ製造セシメ、之ヲ以テ幼稚坐臥ノ際遊戯ノ具ニ換ヘハ、他日小学就業ノ階梯トモ相成其功少カラサルヘク、依テ即今刻成ノ画四十七種製造ノ器二品ヲ班布ス。此余猶漸次製造ニ及フヘク入用ノ向モ之レアラハ、当省製本所ニ於テ払下候条、此旨布達候事。

すなわち「幼童」の家庭教育に用いる教材として絵画や玩具を頒布するというものであり、これらの絵画には「文部省製本所」という朱印が付された。これはそれまでの掛図のほぼ半分程度の大きさのものであり、佐藤は「机上あるいは床面において観るのにふさわしいものと考えられるので、厳密な意味での「掛図」とみることができない」としている。また「幼童」対象とはいうものの、かなり高度な内容のものであり、佐藤は『教育の文化史』で掛図「幼童用の絵画」とし、「絵画」に分類して論じている。1870年代後半から民間において類似の掛図出版が開始されており[6]、本稿で対象とする土浦幼稚園所蔵の掛図は民間によるものである。

3. 土浦幼稚園の開設

土浦幼稚園は明治18（1885）年に土浦西小学校（現・土浦小学校）附属幼稚園として開園した[7]。当時の幼稚園は公私立合わせても全国で30園程度であった。

明治18（1885）年1月18日に土浦西小学校の校長坂本祐一郎が東京女子師範学校付属幼稚園を視察し、土浦町戸長小林渉、学務委員の奥井敬、中村邦敬、菅喜惣平との間で協議を繰り返し、当時の茨城県では初めて開設されることになる。[8] 明治18（1885）年9月15日の仮開園には30名の募集のところ、6名の入園しかなかった。しかし明治20（1887）年には幼児60名と急増し、一室増築を行っている。

土浦幼稚園では明治期にどのような図画教育を行っていたのか保育記録や描画作品が現存していないため不明である。しかしながら土浦幼稚園には明治期の備品目録である「幼稚園図書器械名簿」が3点現存している。目録は恩物玩具・図書・器械・玩具の四項目に分けて収集した物品を記録したものであり、「幼稚園図書器械名簿」（明治三〇年七月改）の資料によれば「恩物玩具目録」の項目に「幼稚園第十恩物　画方」とあり、図画は第十恩物の「画方」として行われていたことがわかった。

4. 土浦幼稚園の掛図

土浦幼稚園で所蔵している掛図のうち、図画に使用されたと推測される掛図は「幼稚園動物掛図」「幼稚園掛図」「幼稚園手技掛図」の3種類である。それぞれについて解説書の調査を行った。

(1) 幼稚園動物掛図

「幼稚園動物掛図」は64.6センチ×45.2センチの大きさのものであり、明治22（1889）年9月10日に小林新兵衛により発行されたものである。図案は山岡鐵作、印刷は下村初太郎であった。土浦幼稚園では8枚現存しており表と裏に動物が描かれている。描かれた動物は「猫」「鼠」「馬」「熊」「牛」「狐」「蝙蝠」「虎」「羊」「犬」「兎」「鹿」「豚」「狸」「猿」の15種類であり、「猿」の裏面には奥付が記載されている。

「幼稚園動物掛図」の使用方法については不明

であったが、筆者は説明書の調査を行い国立国会図書館で所蔵している『幼稚園掛図動物圖話（家庭用獣類部）』[9]が説明書であることを確認した。『幼稚園掛図動物圖話（家庭用獣類部）』においても「幼稚園動物掛図」と同様の15種類の動物が記載・解説されている。巻末には「売捌書」として「茨木市土浦及水戸　柳旦堂」とあり、土浦で『幼稚園掛図動物圖話（家庭用獣類部）』の入手が可能だったことがわかる。『幼稚園掛図動物圖話（家庭用獣類部）』では「猫」について以下のように説明している。

猫ハ猛獣の一種にして地球上到る所人の家に飼養ふ者なり其の容貌ハ至つて美麗なるものにて毛色ハ白、黒、茶、斑等あり其内白黒茶の三色一匹の猫に揃ひたるときは稱へて三毛と云い人々甚だ之を愛す猫の瞳ハ他の獣類と異なりて書の間は補足縮まり夜に入れば愈々丸くなり其の目の力も益々鋭くなるなり四肢の先にハ釣の如き曲りたる鋭き爪あれども平常ハかくして見せず食物ハ肉類を好み又穀物をも食ふ

（性質）性質ハ猛獰ものなれども平時は至つて柔順なるものなり然れども一度び怒りしとき又は鼠を見出したるときハ彼の鋭き爪を立て一時に攫み付くなり又寒気及び水を嫌ひ常に肉類を嗜む特に鼠は最も好物なり

（常習）猫ハ水及び寒気を嫌ふゆえに春の間は太陽の光熱ある所に臥して身を温ため冬に至れば常に臥床に入らんことを貪ぼる年中數度兒を産むものなり

（効用）猫ハ至つて鼠を食ふことを好むを以て人々之れを家に飼ひ養ふて鼠を捕らしめ又其の皮は乾し曝して三粒の胴張に用ゆるものなりまた身には電気を有するゆえに雨風の變を知るために船中には欠くべからざる獣なり[10]

すなわち「猫」の簡単な説明をしたあとに、生物としての習性である「（性質）」と日常の動作である「（常習）」、人間にとって有益な「（効用）」を解説している。この掛図を使用する際に、「（性質）」「（常習）」「（効用）」の3つの説明文を利用することで動物の知識を総合的に教授するという意図がうかがえるが、図画に使用していたかは不明である。

(2) 幼稚園掛図

幼稚園掛図（第二）雀のお宿」「幼稚園掛図（第三）浦島太郎」「幼稚園掛図（第四）兎と亀」は55.4 × 70.5センチの大きさのものであり、明治37（1904）年11月13日に天真堂の中川藤八により発行されたものである。土浦幼稚園では3枚現存している。掛図の右上には「（談話唱歌手技兼用）」と記されており、手技に含まれる図画にも使用されたと推測した。

『愛珠　参』[11]によれば、「第五類掛図」[12]として「幼稚園掛図第三・浦島太郎」、「幼稚園掛図第四・兎と亀」、「幼稚園掛図第五・軍人と看護婦」、「幼稚園掛図第六・朝顔」がある。註には「明治三十七年十一月天真堂発行、以下四点ともに談話、唱歌、手技兼用」とある。『愛珠　参』には「幼稚園掛図第三・浦島太郎」の写真も掲載されており、土浦幼稚園と同一の掛図を愛珠幼稚園でも所蔵していることが確認できた。

「幼稚園掛図」の使用方法についても不明であったが、筆者は解説書の調査を行い国立国会図書館で所蔵している『児童教育に於ける絵画の価値（幼稚園掛図の説明）』[13]が解説書であることを確認した。『児童教育に於ける絵画の価値（幼稚園掛図の説明）』は天真堂編輯部編なるもので、第一章は「総説」、第二章は「各説」として（一）金太郎、（二）舌切雀、（三）浦島太郎、（四）兎と亀、（五）兵卒と看護婦、（六）朝顔について説明しており、土浦幼稚園所蔵の掛図は（二）舌切

雀、（三）浦島太郎、（四）兎と亀である。愛珠幼稚園で所蔵している掛図は（三）浦島太郎、（四）兎と亀、（五）兵卒と看護婦、（六）朝顔である。また『児童教育に於ける絵画の価値（幼稚園掛図の説明）』の巻末には「幼稚園掛図」の広告があり、「幼稚園掛図」には予め説明書が添付され販売されていたことがわかった。

第一章「総説」によれば、「幼稚園幼兒を保育するに、談話は最も必要なる科目」であり、「談話によりて幼兒の道徳的感情を育成し、日常庶物に関する智識を啓発」する。そこで「編者は先づ目下我多數幼稚園に於て用いらるる談話數種」を選択し「幼稚園掛圖の書題」とした。次に「幼稚園の手技は、目下主としてフレーベル氏創設定の二十恩物、及び之に若干の改更を加へたるもの」を用いており、「活動性を満足せしめ、無為閑散に陥るを防ぎ、観察、注意の力を涵養し、想像力を養成し、美の嗜好を助長し、且眼と手との練習」をするために「談話科に用ふる畫題を第三恩物の第一積木に畫き、手技と談話との連絡」によって談話の目的を達成させるものである。また「幼稚園の唱歌に絵画を示す」ことで「直覺的、具体的のもの」にする。すなわち「幼稚園掛圖」は「兒童に掛圖を示して唱歌を歌は」せ、「又手技の前或は手技の後に於て唱歌を歌」って、「深き興味を起し感念を確実」にすることを目的としている[14]。

第二章「各説」では土浦幼稚園所蔵の掛図である（二）舌切雀、（三）浦島太郎、（四）兎と亀について見ていく。各々について「甲　修身としては」「乙　庶物としては」「唱歌」の３項目について述べられている。それを下記に記す。

（二）舌切雀

甲　修身としては

（１）糊を嘗めることにより徒ら事を戒む、（２）老爺の慈悲深きことによりて博愛を知らしむ、（３）雀の饗應及び贈り物によりて報恩を知らしむ、（４）慾婆の葛籠によりて因果の道理を知らしむ、（５）来客を饗應するときの兒童心得を知らしむ、

乙　庶物としては

（１）竹と雀との關係、（２）竹の性質、種類、効用、（３）雀の性質、効用、害、（４）田舎の生活及び其趣味等を知らしむ、

唱歌を談話の間に挟むも興味あることにして、また修身と庶物とは相混じて談話するも宜しく、或いは第一日に修身の目的を達し第二日に庶物を授くるも不可なし。

繪入積木は掛圖に眞似て兒童をして隨意に其繪を組立てしめ、又舌雀を組立てよと命じたる後に掛圖を示すも可なり[15]。

●舌切雀の唱歌（譜は進め々々に同じ）

一、雀々れ宿はどこじや、
　ちゅんちゅんちゅんちゅんちゅんちゅんこちらでござる
　おぢさんよく入つしやい、
　ごちそう致しませう
　れ茶にお菓子お土産につ□ち、
　左様なら帰りませうご機嫌宜しう
　来年の春にまたまた参りせう、

以上より、（二）舌切雀の説明において、手技としては「繪入積木」を使用し「掛圖」を「眞似」し「隨意に其繪を組立て」ることとしているが、図画で使用する方法については述べられていない。

（三）浦島太郎

甲　修身としては

（１）亀を救ふことに因て動物保護（博愛）の必要を知らしむ、（２）亀の浦島を迎ふることによりて報恩を知らしむ、（３）龍宮に抵れることによりて善行に善酬あることを知らしむ、

乙　庶物としては

（1）亀の性質、種類、効用、（2）鯛、鮪、比眼魚、鰹、鯖等、標本又は繪書によりて名□を知らしむ、（3）仮想の龍宮同上、（4）珊瑚、硨磲、眞珠、瑠璃等同上、（5）釣の事を説く、（6）乙姫、玉手箱、白髪の如きは幼稚園幼兒に詳説せさるを可とす。

圖を示して唱歌を一二回歌はしめ後談話を試む、魚類の標本は豫め教壇の引出に入置き談話の順によりて取出して兒童に示し、又兒童をして手づから標本を持ち、詳細に観察せしむ、若し幼稚園の庭池に魚類を放養しあらば談話を之に轉じ、又魚舗の□物の二三を持來りて示すも妙なり。

繪入積木は兒童の最も興味を関するものにして箱に入れたる儘浦島の唱歌を歌はしめ置き、今の唱歌の繪を積木によりて組立てよと命ずる□興味却々深し、談話、手技、唱歌の順序は一定せす。

●浦島太郎の唱歌（譜は幼年唱歌にあり）

一、昔し昔し浦島は、
　子どものなぶる亀を見て、
　あわれと思ひかひとりて、
　深きふちへぞはなちける」

二、或日大きな亀が來て、
　もうしもうし浦島さん、
　りゆうぐうと云ふはよい所、
　そこへ案内致しませう」

三、浦島太郎は亀にのり、
　波の上やら海の底、
　たひしびひらめかつをさば、
　むらがるなかをばわけていで」

四、見れば驚くからもんや、
　珊瑚のはしらやしやこのやね、
　しんじ□やるりでかざりたて、
　夜るも輝くをくごてん」

五、れとひめさまのおきに入り、
　浦島太郎は三年を、
　りゆうぐうとやうでくらすうち、
　わがやこひしくなりにけり」

六、かへりで見ればいへもなく、
　これはふしぎとたまてばこ、
　ひらけば白きけむりたち、
　しらがのちぢとなりにけり」

以上より、（三）浦島太郎の説明において「魚類の標本」を使用し「観察」させることは行うが、手技としては（二）舌切雀と同様で「繪入積木」を使用し「組立て」ることとしており図画で使用する方法については述べられていない。

（四）兎と亀

甲　修身としては

（1）勤勉と堅□時久とを教ふ、（2）自慢と怠慢とを戒む、（3）無謀の競争を為さべらしむ、

乙　庶物としては

（1）兎の性質、種類、効用、（2）亀の性質、種類、効用、（3）小山、池、各草木に就て知らしむ、

掛図によりて談話、唱歌、積木を授くること前諸図の例に異るなく、又此図に因みて競争を試むるも興味なきに非ず、運用の妙は保母其人手腕にあり。

●兎と亀の唱歌（譜は幼年唱歌にあり）

一、もしもし亀よ亀さんよ、
　世界の中にお前ほど、
　歩みのろい者はない、
　どうしてそんなにのろいのか」

二、何をおっしゃる兎さん
　そんならあまへとかけくらべ、
　向ふの小山のふもとまで、
　どちらが先にかけつくか」

三、どんなに亀がいそいでも、

どうせばんまでかかるだろ、
ここらで一寸ひとねむり、
ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう」
四、これはね過ぎたしくじつた、
ぴよんぴよんぴよんぴよんぴよんぴよんぴよん、
あんまりおそい兎さん、
さつきのじまんはどうしたの」

以上より、(四) 兎と亀の説明において、手技としては (二) 舌切雀 (三) 浦島太郎と同様、「積木」を使用することとしており図画で使用する方法については述べられていない。

総合して考えると「幼稚園掛図(第二) 雀のお宿」「幼稚園掛図 (第三) 浦島太郎」「幼稚園掛図 (第四) 兎と亀」の右上には「(談話唱歌手技兼用)」と記されてはいるが、解説書である『児童教育に於ける絵画の価値 (幼稚園掛図の説明)』には手技として「積木」をさしており、図画に使用するとは記されておらずその使用については不明である。

(3) 幼稚園手技掛図

土浦幼稚園には東京造画館が明治期に発行した「幼稚園手技掛図」が 11 枚現存している。(表1) これらは 76.2 センチ× 54.2 センチの大型の掛図であり土浦幼稚園にのみ現存している貴重な掛図である。カラー印刷の紙が貼付されており厚手の掛図である。手技が片面に2～3個描かれており、図画は№6「幼稚園手技掛図　箸環　画キ方」(図1) および№11「幼稚園手技掛図　箸環　剪紙 画キ方」(図2) に掲載されている。「幼稚園手技掛図」について解説書の調査を行ったが不明である。

№6「幼稚園手技掛図　箸環　画キ方」の掛図の「画き方」には縦横の罫線を利用した「ランプ」、白紙部分に「コマ」「机」「標札」「汽車」の5点の図がペンで描かれている。いずれも幼児にとって身近な題材である。同じ面に描かれている「箸環」の図と比較すると、「机」と「汽車」があり図形の構造がほとんど同様であることが確認できた。

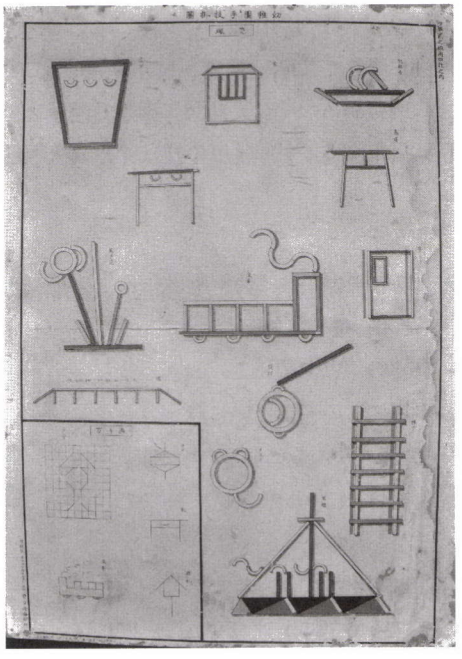

図1　№6「幼稚園手技掛図　箸環　画キ方」

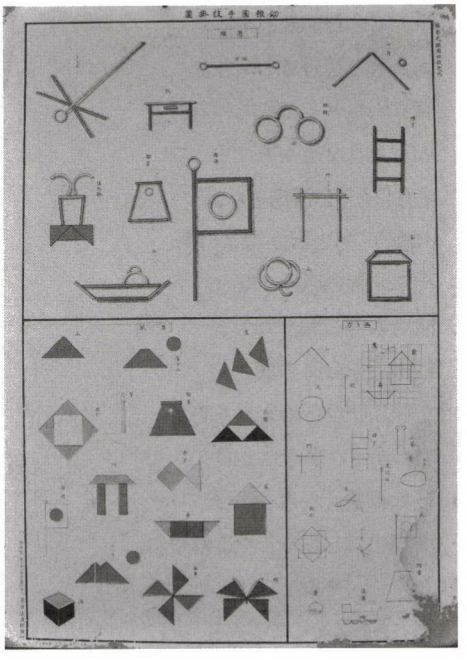

図2　№11「幼稚園手技掛図　箸環　剪紙 画キ方」

№11「幼稚園手技掛図　箸環　剪紙　画キ方」の掛図の「画き方」には縦横の罫線を利用した「家」「舟」が描かれており左上に曲線で「鷹」が描かれている。白紙部分には「山」「杖」「池」「火箸」「梯子」「門」「卵」「電信柱」「魚」「日ノ丸」「トンボ」「紋形」「踏台」「汽車」「栗」があり、合わせて18点がペンで描かれている。いずれも幼児にとって身近な題材である。同じ面に描かれている「箸環」および「剪紙」の図と比較すると、「剪紙」の「家」「舟」「鷹」「山」「国旗（「画き方」では「日ノ丸」）」「踏台」の図形の構造が「画き方」と同様であることがわかった。また「箸環」の「梯子」「門」「国旗（「画き方」では「日ノ丸」）」「踏台」の図形の構造が「画き方」と同様であることが確認できた。また「箸環」にも「トンボ」があり、図形が類似していることがわかった。

以上より、「幼稚園手技掛図」には縦横の罫線を利用した図と白紙に描かれた図が併記していることがわかった。また題材は幼児にとって身近なものであり、同じ面に描かれた他の手技との連携を図っていたことがわかった。

5. おわりに

以上より、土浦幼稚園所蔵の明治期の掛図の中で、図画教育に使用されたと推測される掛図について考察してきた。それらをまとめると下記になる。

①「幼稚園動物掛図」の解説書が『幼稚園掛図動物圖話（家庭用獣類部）』であることを確認した。解説書によって動物の知識を総合的に教授するという意図がうかがえたが、図画に使用していたかは不明である。

②「幼稚園掛図（第二）雀のお宿」「幼稚園掛図（第三）浦島太郎」「幼稚園掛図（第四）兎と亀」の解説書が『児童教育に於ける絵画の価値（幼稚園掛図の説明）』であることを確認した。掛図の右上には「（談話唱歌手技兼用）」と記されてはいるが、使用方法において、手技としては「繪入積木」を使用し「掛圖」を「眞似」し「隨意に其繪を組立て」ることとしており、図画で使用する方法については述べられていない。

③幼稚園手技掛図

東京造画館が明治期に発行した「幼稚園手技掛図」により、図画は№6「幼稚園手技掛図　箸環　画キ方」および№11「幼稚園手技掛図　箸環　剪紙 画キ方」に掲載されていることがわかった。縦横の罫線を利用した図と白紙に描かれた図を併記していることがわかった。また題材は幼児にとって身近なものであり、同じ面に描かれた他の手技との連携を図っていたことがわかった。

「幼稚園手技掛図」には縦横の罫線を利用した図と白紙に描かれた図が併記されているが、これは当時の幼稚園の図画教育の実情に合わせたものだと考える。また他の手技で行われた図形と「画方」の図を関連させ図を提示しているが、愛珠幼稚園の「保育日記・第壹の部」（明治37(1904)年4月4日～明治38(1905)年3月25日）では箸排べと関連させ直線の組み合わせを描かせたり[16]、「縫取」と「画方」を関連付けて行ったという記録があった。他の手技の課目と図画を組み合わせる方法をとることによって、幼児にとって輪郭線を描くことが容易になるという利点があったと考えられる。

今後の課題としては「幼稚園手技掛図」の解説書の調査、「幼稚園手技掛図」の図版の原典調査をすすめ明治期の図画教育の研究を深めていきたい。

1　牧野由理「幼稚園黎明期における造形教育の研究（1）」『美術教育学』第31号, 2010, pp.343-352

2　牧野由理「幼稚園黎明期における造形教育の研究（2）」

『大学美術教育学会誌』第42号, 2010, pp.335-341

[3] 牧野由理「明治後期の幼稚園における図画：愛珠幼稚園の保育記録と描画作品から」『美術教育学』第33号, 2012, 審査中

[4] 愛珠幼稚園「保育日記・第壹の部」, 1905年1月16日

[5] 佐藤秀夫「掛図の研究・序説」『教育の文化史3』阿吽社, 2005 , p.220

[6] 同上, p.233

[7] 設立の経緯については是澤博昭による「簡易幼稚園の設立経緯とその実像　－土浦幼稚園とその時代－」(『土浦市立博物館第20回特別展　幼稚園誕生』1998) に詳しい。

[8] 土浦市立博物館編『幼稚園誕生：土浦幼稚園と明治期の教育玩具』土浦市立博物館, 1998 , p.20

[9] 山岡鉄作『幼稚園掛図動物圖話（家庭用獣類部）』小林新兵衛, 1889

[10] 同上, pp.1-3

[11] 愛珠幼稚園編『愛珠　参』愛珠会, 1969

[12] 同上, p.21

[13] 天真堂編輯部編『児童教育に於ける絵画の価値（幼稚園掛図の説明）』天真堂, 1904

[14] 同上, pp.1-5

[15] 愛珠幼稚園「保育日記・第壹の部」1904年11月4日, 4月13日, 4月20日

[16] 愛珠幼稚園「保育日記・第壹の部」1905年5月4日, 5月12日, 11月15日　上記引用17とは別の保育記録である。

図版典拠　図1～2　土浦市立博物館

本研究は、科学研究費補助金による若手研究（B）研究課題番号23730844の研究の一部である。

表1　土浦幼稚園所蔵の「幼稚園手技掛図」

番号	表　題	作成者（著者・編纂者・編集者）	宛　先（版元・書肆・発行所、写本者）	作成年
1	幼稚園手技掛図 摺紙 豆細工 南京豆繋ぎ方〔76.2 × 54.2〕	画作印刷兼発行 塚本岩三郎	発行 東京造画館	（明治）
2	幼稚園手技掛図 組紙 剪紙 織紙 粘土細工〔76.2 × 54.2〕	画作印刷兼発行 塚本岩三郎	発行 東京造画館	（明治）
3	幼稚園手技掛図 積木 排板〔76.2 × 54.2〕	画作印刷兼発行 塚本岩三郎	発行 東京造画館	（明治）
4	幼稚園手技掛図 箸環 繍紙〔76.2 × 54.2〕	画作印刷兼発行 塚本岩三郎	発行 東京造画館	（明治）
5	幼稚園手技掛図 積木 排板〔76.2 × 54.2〕	画作印刷兼発行 塚本岩三郎	発行 東京造画館	（明治）
6	幼稚園手技掛図 箸環 画キ方〔76.2 × 54.2〕	画作印刷兼発行 塚本岩三郎	発行 東京造画館	（明治）
7	幼稚園手技掛図 剪紙 織紙 粘土細工 組紙〔76.2 × 54.2〕	画作印刷兼発行 塚本岩三郎	発行 東京造画館	（明治）
8	幼稚園手技掛図 摺紙 豆細工 繋キ方〔76.2 × 54.2〕	画作印刷兼発行 塚本岩三郎	発行 東京造画館	（明治）
9	幼稚園手技掛図 紐置 繋キ方〔76.2 × 54.2〕	画作印刷兼発行 塚本岩三郎	発行 東京造画館	（明治）
10	幼稚園手技掛図 摺紙 豆細工〔76.2 × 54.2〕	画作印刷兼発行 塚本岩三郎	発行 東京造画館	（明治）
11	幼稚園手技掛図 箸環 剪紙 画キ方〔76.2 × 54.2〕	画作印刷兼発行 塚本岩三郎	発行 東京造画館	（明治）